【64】

氏　名（本籍）	鷲　﨑　秀　一（佐 賀 県）
学 位 の 種 類	博　　士（文　　学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　4527　号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	**近代文学における〈笑い〉の小説の生成**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	新　保　邦　寛
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	加　藤　行　夫
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	芳　賀　紀　雄
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	松　本　　肇
副　査	筑波大学准教授	博士（学術）	秋　山　佳奈子

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は，近代〈笑い〉文学の生成過程を明らかにしようとするものだが，それを担った作家の重要な作品が孕む諸問題を検討することで，より浩瀚な日本近代〈笑い〉文学史の構想を目論むものである。

本論文の構成は，以下の通りである。

序　章　近代における〈笑い〉の変容と本論文の目的

第Ⅰ部

第一章　未だ見ぬ真の滑稽〈ユーモア〉－国木田独歩「郊外」

第二章　近代滑稽小説の系譜－国木田独歩「園遊会」

第Ⅱ部

第一章　〈鼻〉言説と〈笑い〉を問う文学－芥川龍之介「鼻」論

第二章　芥川龍之介「片恋」論－チャップリン流行下における〈西洋の曽我の家〉表象から

第三章　岩野泡鳴「猫八」に見る〈笑い〉の近代文学－有情滑稽に潜む批評精神

第四章　都会病の有情滑稽－岩野泡鳴「浅間の霊」

第五章　芥川龍之介が見た宇野浩二の「エスプリ・ガウロア」－「長い恋仲」と滑稽文学者海賀変哲との対比に示された世界

終　章　まとめと展望

序章は通常，研究の目的や方法を述べるものだが，本論文の場合，それに止まらず，近代〈笑い〉文学の生成過程が呈示されているので，いわば総論的な章と言ってよい。すなわち，近代以降も近世庶民の言語遊戯的笑いを繰り返してきた文壇に，明治末期に至って改革の気運が起こり，西洋文芸の〈ユーモア〉概念をモデルにした人間性から自ずと漏れる笑いが要請されるものの，主に享受者の意識がそれに追い付けなかったために，雑誌であれ実作の試みであれ育つことなく潰えてしまう。それが大正期になると，そうした新しい笑いを受容する土壌も育ち近代〈笑い〉文学が一気に開花することになる。しかも，そこには新しいメディアであった映画の影響が無視しえず，特にチャップリン映画が〈ユーモア〉理解の上で果した役割は大であっ

た，と論じている。

本論は二部構成で，第Ⅰ部においては，雑誌編集を通し〈笑い〉の改良に積極的に取り組み，かつ〈ユーモア〉受容に関し先駆者の一人と目される国木田独歩を取り上げている。第一章「郊外」論は，彼の〈ユーモア小説〉の試みとして今日定評のある作品に焦点を当てつつ，さらにそれが発表時点では〈写生文〉としか見做されなかった事実を論拠に，明治文壇における〈ユーモア〉概念の不在にも言及した論である。そこで同時代の〈笑い〉の水準を推し測るべく，続く第二章では，企業のPR誌の求めに応じて書き下した滑稽小説「園遊会」を考察の対象としているが，それが，単に近世戯作の常套的〈笑い〉を多用するに止まらず，〈弥次喜多〉物をフレームとするテキストであることを明らかにしている。

第Ⅱ部は，大正文壇を舞台に花開いた近代〈笑い〉文学，それを主体的に担った三人の作家の動向に注目し，その各々の問題作や話題作の分析を通して，同時代の〈笑い〉の特質や方法に迫ろうとするものである。その際，作品個々の〈笑い〉を笑いたらしめているところの特定の社会的文化的コンテキストの掘り起こしに力を注いでいる。

第一章では，「吾輩は猫である」など〈笑い〉の文学の可能性に自覚的であった夏目漱石の問題意識を引き継ぐ形で文学的出発を期した芥川龍之介を取り上げて，その代表的試みであった「鼻」を論じている。これまで〈自意識の喜劇〉と言いつつ人間的苦悩に軸足を置いて理解されてきたこの作品も，鼻を笑いの対象とする伝統的文脈の中では，高僧の自からなる人間性を描いた〈ユーモア小説〉である他なく，なおかつ物語に介入する語り手のコメントがいわば〈笑い〉論になっていて，〈笑い〉の考察を深める同時代思潮の反映を見ない訳にはいかない，とするのがその論旨である。続く第二章では芥川の「初恋」を検討し，映画の与えた影響に言及している。すなわち，当時チャップリンと共に人気の喜劇映画俳優であったマックス・レンデに恋した薄幸の女芸者のやや滑稽な思いをペーソス溢れる筆致で描いたこの小説は，同時にそうした女の思いに気付かず自惚れる男の愚かしさも巧まずして現われるように描かれていて，正にチャップリン喜劇宛らの作品に仕上っている，と論じている。

第三章・第四章は，〈有情滑稽〉もの，すなわち〈ユーモア小説〉の書き手を自認していた岩野泡鳴の作品集『猫八』の方法を問題にしている。すなわち「猫八」は，久米正雄「虎」の合評会に連れ出された芸人江戸屋猫八が，その内容に自分の人生を重ねて悲哀を感じるという典型的な〈有情滑稽〉作品と知れるものの，同時代の文壇を席巻した文学観をめぐる論争を下敷きにすると，こうした猫八の率直な共感によって技巧派の久米文学を容認しないリアリズムに固執する文壇作家の愚劣さが焙り出される仕掛けになっていることも窺える，と結論付け，さらに，こうした重層性こそが，近代〈笑い〉文学の大きな特徴であると論じている。また「浅間の霊」も，実直な田舎者たる語り手の目に映る都会生活や人々の怪しさがおかしみを持って語られていると思いきや，いつの間にか都会生活に犯され次第に怪しげな状態に傾く語り手自身のおかしさが描かれ出し，しかもそうした彼の怪しい振舞を何とも思わぬ都会の怪しさがさらに強調されるという，一種の円環構造の作品であり，正に〈神経病〉時代と言われた同時代の人間の悲喜劇をごく自然に描いた，〈有情滑稽〉ものの見本のような作品と論じている。

第五章では，近代〈笑い〉文学を標榜しつつ文壇デビューを果した宇野浩二に対する芥川の評価を問題にしているが，要するに宇野の年間の活躍を顧みる芥川が，彼の代表作でなく敢えて「長い恋仲」に注目した理由について論じたものである。それは一見脱線に次ぐ脱線で筋のない単なるナンセンスとしか思えない小説だが，実は多くの先行作品を踏まえつつ飽くなき愚行を繰り返す人間性の真実に迫ったユーモア溢れる作品なのであって，芥川は，一時代前に〈笑い〉の作家で鳴らした海賀変哲を引き合いにして，その文学的レベルがいかに高いかを主張しているのであるとし，さらにそれはそのまま芥川が，〈笑い〉文学をいかに重視していたかを示す証しに他ならない，と論じている。かくして近代文学の主役となった〈笑い〉は，続く昭和初期において，〈ナンセンス〉や〈ファルス〉といった多様な試みへと発展し，その位置を揺るぎない

ものにする，と結んでいる。

審 査 の 結 果 の 要 旨

大正・昭和初期に活躍した作家で，〈笑い〉に関心を持たなかったものはないと言ってもよい。しかも大正期において，ベルグソン『笑い』の衝撃で流行する〈笑い〉論に駆り立てられ，あるいはチャップリン喜劇映画といった新しいメディアの登場に後押しされるままに〈笑い〉が近代文学の主役の座を占めるような劇的事態が起こっていくため，多くの近代文学研究者の注意を惹き，雑誌の特集や企画物の出版も途切れることないように思う。それにも拘らず，これまで近代〈笑い〉文学史といった構想が練られた形跡がない。そもそも，戯作や大衆芸能に独占されていた感のある〈笑い〉を，近代文学で引き受けるべく必要な改良が各方面で摸索されていた明治末期の動向すら，ほとんど知られていないのが現況である。従って本論文は，そうした文学史的な構想の下にまとめられた最初の近代〈笑い〉文学の研究である，と言える。

また，著者が，作品解釈に際し取り分け留意した，各作品の〈笑い〉を醸し出すところの何がしかの社会的文化的コンテキストの掘り起こしに努めたことも，特筆に値する。その結果，各作品の〈笑い〉の輪郭が明瞭になったことは無論ながら，例えば芥川龍之介「初恋」論における初期喜劇映画への眼差しの如く，あるいは岩野泡鳴「浅間の霊」論における近代都市文明に直面した人々の病的心理の如く，文学テキストに刷り込まれた同時代の多様な記憶を鮮明にしていて，当該作品研究の進展に寄与している点も，本論文の重要な成果の一つと認められる。

とはいえ，瑕瑾がない訳ではない。本論文は，西欧文学の〈ユーモア〉受容史と言い換えてもよい。その概念を日本文学に移入すべく努めた作家として欠かすことができないのが，森鴎外と夏目漱石である。〈有情滑稽〉なる翻訳語は鴎外が考案し，後の岩野泡鳴につないでいくとはいえ，それぞれの理解には差異がある。また漱石は，「吾輩は猫である」などを書いて，芥川龍之介ら大正作家の〈笑い〉の文学への道を拓いているが，その道筋を具体的に示す必要がある。そうした点に本論文も触れてない訳ではないが，充分とはいえない。

以上のような課題は残るが，本論文の評価をいささかも低めるものではない。近代を代表する作家とその作品を視野に収めた幅広く重厚な研究は，日本近代文学研究の将来を担うものにふさわしく，著者の今後の活躍が大いに期待される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。